

Golegã

について



写真: ©RCL-RuiCunha

ゴレガン

ゴレガン (Golegã) は、テージョ川 (Rio Tejo) とその支流であるアルモンダ川 (Rio Almonda)、その2つの川にはさまれた肥沃な地域にあります。この地理上の条件から開墾が始められ、土地が開かれた当初から、農業を基本として経済的な発展を遂げることになりました。

12世紀、アフォンソ・エンリケス (Afonso Henriques) によるレコンキスタ (国土回復運動) の後、農耕用に王はこの地方をテンプル騎士団に与えました。この時代の記憶は、現在この地方の重要な農業生産の中心地となっている、キンタ・ダ・カルディガ (Quinta da Cardiga) の歴史の中に今も息づいています。銃眼を頂いてそびえる塔は、かつての城の名残です。その他にも、荘園が宗教的な後ろだてとなって建設した建物そのものや、礼拝堂、回廊など、美術的な建築例がさまざまに見られます。また、同じく12世紀中に、ガリシア (Galiza) 出身の一人の女性の希望によってこの地に旅籠が作られました。この地方がトマル (Tomar) とサンタレン (Santarém) を結ぶ街道筋に位置していたからです。そのためこの地は、ヴェンダ・ダ・ガレーガ (Venda da Galega) (「ガリシア女の店」の意) と呼ばれるようになりました。店は繁盛し、農業に適した条件がそろった地域であることから、それが刺激となって商業、農業の発展が促され、人々は競ってこの地に定住するようになりました。まもなく村はポヴォア・ダ・ガレーガ (Póvoa da Galega) と名を変え、やがてヴィラ・ダ・ガレーガとなりました。その語がなまって、現在の町の名前である「ゴレガン」となりました。

ゴレガンは、正式には1534年にジョアン3世 (D. João III) により村として認められるにいたりましたが、それに先立ち、前国王マヌエル1世 (D. Manuel I) もまたその発展に大いに心を砕きました。国王のこの地への関心の高さや注いだ努力の大きさは、国王の後ろだてで建設された教会 (Igreja Matriz) の建築からもうかがい知ることができます。

農業とともに村は大規模な発展を遂げ、その結果、この地に定期市がたち、市場ができました。農民たちは、そこに自分たちの農産物や家畜を持ち寄るようになりました。18世紀には、11月1日に聖マルティーニョ (São Martinho) をたたえ、特別な祭りが開催されていました。これは馬の飼育を手がけている者の間では、ことに人気のある祭りとなりました。というのは、育てあげた純血種の馬を披露するのにまたとない機会となったからです。この頃、乗馬とそれに関連する競技会が初めて開催されました。この祭り自体も徐々に大きなものとなり、それが前身となって今日のポルトガル馬の祭典 (Feira Nacional do Cavalo) となりました。これは現在も国内最大の馬のイベントとして、非常に重要な位置を占める祭りとなっています。

この町を訪れた折にぜひともお勧めしたいのが、19世紀の著名な写真家カルロス・レルヴァス (Carlos Relvas) のかつてのスタジオを囲んで広がる、ロマンチックな庭園の散策です。また、マルティンス・コレイア美術館 (Museu Martins Correia) を訪れるのもよいでしょう。現代彫刻家である彼の作品が収められています。この2人はゴレガン出身であり、今日の町の名を知らしめるのに、なんらかの形で貢献した人物です。

ゴレガンの近くには、テージョ川とアルモンダ川が合流する地点にパウロ・ド・ボキロボ自然保護区 (Reserva Natural do Paul do

Boquilobo) があります。